

# 仏説阿弥陀經

③



満井秀城

本願寺派司教

## 名義段—仏名のいわれ

読者の皆様のお一人お一人のお名前には、名付けられた方のどんな思いが込められているでしょうか。「名は体をあらわす」といわれますが、なかなか名に込められた思いの通りには生きられないのが私たちです。今回拝読するご文は、阿弥陀仏のお名前のいわれについて述べられた一段となります。ここには、阿弥陀仏がその名前の通りの仏さまであることが説かれています。一体阿弥陀仏はどんな仏さまなのでしょう。お名前のいわれを味わわせていただきます。

### 【註釈本文】 ▼二二三頁

【四】 舍利弗、なんぢが意においていかん。かの仏をなんがゆゑぞ阿弥陀と号する。舍利弗、かの仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障礙するところなし。このゆゑに号して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の壽命およびその人民〔の壽命〕も無量無辺阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく。舍利弗、阿弥陀仏は、成仏よりこのかたに十劫なり。

### 【現代語訳】 ▼『浄土三部經（現代語訳）』二二三頁

【四】 舍利弗よ、そなたはどう思うか。なぜその仏を阿弥陀と申しあげるのだろうか。舍利弗よ、その仏の光明には限りがなく、すべての国々を照らして何ものにもさまたげられることがない。それで阿弥陀と申しあげるのである。また舍利弗よ、その仏の壽命とその国の人々の壽命もともに限りがなく、実にはかり知れないほど長い。それで阿弥陀と申しあげるのである。舍利弗よ、この阿弥陀仏が仏になられてから、今日まですでに十劫という長い時間が過ぎていく。

また舍利弗、かの仏に無量無辺の声聞の弟子あり、みな阿羅漢なり。これ算数のよく知るところにあらず。もろもろの菩薩衆、またまたかくのごとし。舍利弗、かの仏国土には、かくのごときの功德莊嚴を成就せり。

また舍利弗よ、その仏のもとには数限りない声聞の弟子たちがいて、みな阿羅漢のさとりを得ている。その数の多いことは、とても数え尽すことができない。また菩薩たちの数もそれと同じく、数え尽すことができない。舍利弗よ、阿弥陀仏の国はこのようなるわしいすがたをそなえているのである。

### ■光寿無量の仏

前回、本論にあたる正宗分冒頭に、浄土の三種のうるわしいすがた（三種莊嚴）をまとめて略説・略讃されていると申しました。「これより西方に、十萬億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ」が、「国土莊嚴」。「その土に仏まします、阿弥陀と号す」が、「仏莊嚴」。「いま現にましまして法を説きたまふ」が「菩薩莊嚴」に相当すると申しました。

この内、「世界あり、名づけて極楽といふ」について、釈尊が舍利弗に、「かの土をなんがゆゑぞ名づけて極楽とする」と、「極楽」と名づけた理由について問いかけます。しかし舍利弗から答えがなく、釈尊ご自身が、その理由を詳しくお説きくだされたのが、前回見た国土について述べられる「依報段」でした。

この依報段に続いて、先の略讃の「その土に仏まします、阿

弥陀と号す」について、その理由を舍利弗に尋ねる所から今回の部分が始まります。

「舍利弗、なんぢが意においていかん」。「舍利弗よ、あなたの思いの中ではないかがですか」。つまり、「あなた、どう思いますか」と問いかけます。「かの仏をなんがゆゑぞ阿弥陀と号す」。ところが舍利弗からは、やはり答えがありません。これも、浄土や阿弥陀仏という、さとりの世界のことは、人間の知恵や論理では及ばないことをあらわしています（本誌97号54頁参照）。

そこで釈尊ご自身が、「舍利弗、かの仏の光明無量にして、……」等と、その所以を説かれます。この段は、なぜ阿弥陀仏と名づけるかという、仏名のいわれについての一段ですから、「名義段」と称しています。その答えについて、光明無量・寿命無量の故に阿弥陀と名づけると説かれています。

阿弥陀仏が救いの対象とされた私たちの世界は、時間と空間

の世界です。したがって、時間と空間に限界があれば、十方衆生を等しく救うことができません。十方衆生を等しく救う本願の実現には、光寿無量は不可欠のお徳です。

サンスクリット語では、アミターユスが無量寿の意、アミターバが無量光の意味ですから、両義を込めて「阿弥陀」と音写されていることになるでしょう。

### ■阿弥陀仏だけの徳

ところで、親鸞聖人は、実にたくさんのお書き下さいました。今日、「三帖和讃」として、「浄土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」がまとめられています。この内、「浄土和讃」は、主として「浄土三部経」を中心とした經典の法義が述べられています。

「浄土和讃」の最初は、「讃阿弥陀仏偈讚」です。「讃阿弥陀仏偈」は、曇鸞大師が『大経』の法義を讃嘆された聖教です。すから、その内容は『大経』の法義です。「浄土和讃」では、これに続いて「大経讚」、「観経讚」、「弥陀経讚」という「浄土三部経」の和讃となり、『阿弥陀経』の意を示された「弥陀経讚」は五首あります。その最初の和讃が、  
十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし

いただくのです。

お仏壇の仏飯は、過去帳の前にお供えしません。ご本尊の前、あるいは、ご本尊とお脇掛にお供えします。先立たれた方々は、位牌や過去帳の中にはおられません。お墓の下にもおられません。『空善聞書』という蓮如上人の語録の中に、法然聖人のお言葉として伝わっているものに、

わがあととは、称名あるところ、すなはち、わがあととなり  
(中略)。いはい(位牌) そとば(卒塔婆)をおがむは、輪

撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる

(五七一頁)

です。「阿弥陀となづけたてまつる」とあるように、名義段の内容を和讃にされています。

『阿弥陀経』の名義段では、先ほど見たように、光明無量・寿命無量の故に阿弥陀仏と名づけると説かれていました。それなら、「光寿無量のゆえなれば、阿弥陀となづけたてまつる」とお書きくださってもよさそうです。しかし、親鸞聖人は、「撰取してすてざれば」と述べられ、そこに大きな意味があります。光寿無量の徳は、実は阿弥陀仏だけの徳ではありません。他の諸仏にも光寿無量の徳を具えた仏はおられます。阿弥陀仏だけの特別な徳とは何か。この視点から、今の和讃が書かれたのです。「撰取してすてざれば」、撰取不捨こそが阿弥陀仏だけの特別な徳なのです。

『阿弥陀経』にも「撰取不捨」の内容が説かれています。「かの仏の寿命およびその人民(の寿命)も」とあるように、阿弥陀仏の徳が浄土の往生人に及ぶのであって、これこそが阿弥陀仏ならではの特別な徳で、これを「弥陀と同証」とも申します。浄土に往生した者は、浄土の徳によって、往生即成仏のさとりを阿弥陀仏と同じくひらき、迷える者を救うはたらきをさせて

廻するものものすることなり

と書かれています。先立たれた方がたは、お念仏とともに、阿弥陀さまとともに、いつも、私たちのそばで見守ってくださいています。だから、お供えは、阿弥陀さまの前に置くのです。

### ■阿弥陀さまは忘れない

親鸞聖人は、「撰取してすてざれば」とある所に、左訓を施されています(国宝本)。

撰めとる。ひとたびとりて永く捨てぬなり。撰はもの逃ぐるを追はへとるなり。撰はをさめとる、取は迎へとる (五七一頁脚註)

「もの逃ぐるを追はへとる」。私たちは、如来さまに背を向けて逃げ回っています。用のある時だけ、「お助けください」、「お願いします」と仏さまの方を向き、用のない時は、「仏(ほとけ)、放つとけ」と見向きもしないのが、私たちのあり方です。自分の都合に合わせて如来さまを利用しようとしています。阿弥陀さまは、こういう自力の土俵には乗られません。私たちが、どこを向いても、つねに私たちに追いかけてくださる仏さまです。

子どもが、お風呂から上がって、ふざけて走り回っています。それを、お母さんが追いかけて、ついにはバスタオルでくるめ取ってください。蓮如上人は、

弥陀をたのめる人は、南無阿弥陀仏に身をばまるめたることなり  
(二六三頁)

と述べています。阿弥陀さまに背を向けて逃げ回っている私を、追いかけて追いかけて、ついには南無阿弥陀仏でくるめ取ってくださいさるのです。

「ひとたびとりて永く捨てぬなり」。ひとたび阿弥陀さまにいだかれたものは、必ず仏にならせていただくのです。「お念仏だけで、どうしてさとりをひらくことができるだろうか」、その答えが、「撰取不捨」。ひとたび阿弥陀さまにいだかれたものは、必ず仏にならせていただくのです。お念仏申す身になれたということは、南無阿弥陀仏にぐるめ取られ、阿弥陀さまに、すでにいだかれているのです。だからこそ、必ず仏にならせていただけるのです。

数年前、自坊のある総代さんから、相談を受けました。「家内は元氣だったころは、お寺参りを喜び、ご法義を喜ぶ人だった。それが今、アルツハイマー性認知症にかかり、合掌することも忘れてるんです。どうしてあげたらいいんでしょう」と



カッチー・クティー

祇園精舎は、コーサラ国・舎衛城の長者であった須達（スダッタ）が、コーサラ国の太子であった祇陀太子から買い取り、積尊に寄進したものである。写真は、舎衛城内の須達長者の邸宅跡に建てられたストウパーの跡といわれている。

この『往生礼讃』の文によって、『阿弥陀経』の名義段をご解説されたので、『観経』の「撰取不捨」の語を用いられたと考えられます。

### ■十劫成仏の阿弥陀仏

名義段には、さらに阿弥陀仏の寿命無量の徳について、

いのです。とつきのことで、十分な答えにならなかつたのですが、こう申しました。「私たちは、いつ、どんな身になるかわかりません。私たちが阿弥陀さまのことを忘れても、阿弥陀さまは私たちのことを決して忘れてはおられません。撰取不捨の仏さまですから」と。

### ■なぜ『観経』の「撰取不捨」の語を？

一言付言しておく、ご存じのように、「撰取不捨」は、『観経』の言葉で、『阿弥陀経』には出てきません。先に見たように、「無所障礙（障礙するところなし）」「及其人民」とありますが、「撰取不捨」とはありません。『阿弥陀経』になく、『観経』の語を、『阿弥陀経』の和讃で述べられるのは何故でしょう。それは、善導大師の釈義によっているとされます。『往生礼讃』には、次のような一節があります。

問ひていはく、なんがゆゑぞ阿弥陀と号けたてまつる。答へていはく、『阿弥陀経』および『観経』にのたまはく、「かの仏の光明は無量にして十方国を照らすに障礙するところなし。ただ念仏の衆生を觀そなはして、撰取して捨てたまはざるがゆゑに阿弥陀と名づけたてまつる」と

(七祖六六二頁)

舍利弗、阿弥陀仏は、成仏よりこのかたいまに十劫なりと、十劫成仏が示されています。十劫とは非常に長い時間のことです。このことは『大経』に「成仏よりこのかた、おおよそ十劫を歴たまへり」(二八頁)とあるのと同じです。親鸞聖人も、和讃に、「弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫をへたまへり」(五五七頁)と詠まれています。

『大経』で十劫成仏が説かれた部分は、阿難が、「その仏、成道したまひしよりこのかた、いくばくの時を経たまへりとやせん」(二八頁)と質問したのに対して、積尊が答えられたわけですが、『阿弥陀経』では、阿弥陀仏が報身仏であることを示すためと思われまふ。

仏教では、一般に仏に三身説を立てます。法身・報身・応身(ここから化身を開けば四身説になります)の三身です。法身とは始めも終りもない仏身。応身とは、ちょうど積尊のように、降誕という始めもあるし入滅という終りもある仏身。報身とは、始めはあるが終りはない仏身です。阿弥陀仏が報身仏であることを、十劫成仏として説かれたものと思われまふ。

ところが一方で、親鸞聖人は和讃に、

弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも、ひさしき仏とみえたまふ (五六六頁)

とも述べておられます。「いまに十劫とときたれど」という語と、『大経』や『阿弥陀経』、また先の和讃の十劫成仏の内容とは矛盾した内容に見えます。

「塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみえたまふ」と、「みえたまふ」とありますから、何かに書いてあるということですが。「塵点久遠劫」は、『法華経』「寿量品」に、釈尊の成仏を「塵点久遠劫」（無限の過去）と説かれている部分に見えます。また同じ『法華経』の「化城喻品」では、大通智勝仏の子に、釈尊とともに、その兄として阿弥陀仏の名が見え、釈尊の兄ですから、釈尊よりも「ひさしき仏」とみえるわけです。

「十劫成仏」と説かれていますが、実は、無限の過去の成仏でもあるということです。「塵点久遠劫」という語があることなど、直接的には、『法華経』に見られる内容ですが、この和讃が「大経讃」にあるのは、『大経』からもうかがえることになるはずですが。

『大経』正宗分の最初にある五十三仏が、魏訳では、錠光如来から、「次に」「次に」と時代を下って説かれるのに対し（九頁、唐訳『如来会』では、「前に」「前に」と遡って説かれています。一見矛盾しているようですが、魏訳のように時代を下って説かれる阿弥陀仏は十劫成道の仏で、唐訳のように、前に前

にと遡っての説示は久遠成道の阿弥陀仏だと見ることができません。「大経讃」の順序から見ると、先の「塵点久遠劫よりも」の和讃は、「如来興世の本意には」（五六六頁）という序分の法義の和讃の直後、ちょうど正宗分の最初に当る位置にあり、『大経』に照らせば、五十三仏の所と見ることができ、その意味において、「大経讃」では久遠成仏が示されていると考えることができます。

久遠の成仏なら、十劫成仏の阿弥陀仏は、どういう意味かが問題となります。それは、久遠の成仏から、私たち凡夫の目線に降りて、さどりの世界から形を示し、法蔵菩薩となり、阿弥陀仏という救いの御名を垂れて、私を救う仏としてあらわれてくださった報身仏ということですが。

さどりの世界は、「いろもなし、かたちもまします。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり」（『唯信鈔文意』、七〇九頁）と言われています。これでは、私たち凡夫には、関わりを持つことができません。そこで、凡夫の目線に降りてくださったのです。私たちも、世間では、ひとかどの大人であり、社会人です。しかし、子どもに接する時は、子どもの目線に降りて接します。「十劫成仏」の阿弥陀仏は、私たちの目線まで降りてくださった大慈大悲の救いの姿です。

最後に、眷属の菩薩について、『阿弥陀経』では、浄土には、数え切れないほどの声聞と菩薩がいると説かれています。浄土は「二乗種不生（二乗の種生ぜず）」（『浄土論』、七祖三二頁）で、自己の解脱のみを目的とする声聞はいないはずですが、これは「余方に因順して（この世界の概念に合せて）」（『大経』、三七頁）、つまり言わば出身地の名前として声聞の名があるのです。序分で見たとように『阿弥陀経』の対告衆は、多くの阿羅漢と菩薩でした（二二頁）。釈尊は、聴いている弟子たちに、「ほら、あなたも往ける世界ですよ」と語っておられます。『阿弥陀経』の説法の相手は、直接には目の前の阿羅漢や菩薩ですが、釈尊には、おそらく私たち末代の凡夫が見えていると思います。いま、この『阿弥陀経』に出遇っている私たち末代の凡夫にも、「あなたの行き先がここにありますよ」と勧めてくださっているでしょう。

#### 学習のポイント

- (1) なぜ親鸞聖人は「撰取不捨」の語によって阿弥陀仏の徳を表わされたのでしょうか。
- (2) 「久遠成仏」と「十劫成仏」はどんな関係でしょうか。



祇園精舎の近くの農村風景